

中国川西高原・洱海系青銅器の変遷

宮本，一夫

九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門：教授：東アジア考古学

<https://doi.org/10.15017/16908>

出版情報：史淵. 147, pp.1-28, 2010-03-01. Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

中国川西高原・洱海系青銅器の変遷

宮 本 一 夫

1 はじめに

山字形格銅剣を特徴とする銅剣が、中国四川省西部の高原地帯から雲南省西部の高原地帯に分布している。雅礮江流域や瀾滄江流域などに相当し、山岳地帯で現在はチベット族や羌族などの居住域である。四川省西部の高原地帯を川西高原と呼び、雲南省西部の高原地帯を洱海地域とここでは呼んでおきたい。前者の川西高原は、石棺墓という石組の墓葬が分布する地域であり、その石棺墓に青銅器が副葬される。後者の洱海地域には、石棺墓も分布するが土坑墓が優勢であり、この地域の青銅器を滇西銅剣（張増祺1983）あるいは洱海系銅剣（町田2006）と呼んでいる。本稿ではこの地域の青銅器全般を指しかつ洱海周辺の青銅器を示すことから、洱海系青銅器の用語を用いることにする⁽¹⁾。両地域は、山字形格銅剣をはじめとして共通した青銅器の特徴を有しており、同一の青銅器文化圏を形成しているといつてよいであろう。また、一鑄式である山字形格銅剣などは、北方青銅器文化の青銅短剣の系譜に連なるものであると考えられてきた（高浜1977）。さらに、雲南石寨山文化の動物闘争文が飾られた帯鉤などからも、北方青銅器文化との接触によってこれらの青銅器文化が形成されていると想定されている。さらに青銅器文化の類似性を含めて、川西高原・洱海地域から中国西北部・北部から遼東に至る同一の自然環境や生態系を背景とした同一の文化帯として辺地半月形文化伝播帯説（童恩生1987）は有名である。童恩生の提唱したこの仮説は衝撃的で影響力の大きいものであったが、私自身はこれとは異なった見方をしている（宮本2009）。ともかくも北方

青銅器文化が一定の関連性を以て川西高原・洱海地域の青銅器文化と接触していた可能性は高いといえよう。しかし、その具体的な影響関係やその後に生まれる独自の青銅器文化としての地域的な特色あるいはそうしたものの年代観などは未だ不明のままであるといえることができる。仮説的にあるいは漠然としてその影響関係を感じられつつも、具体的な年代を踏まえた関連性についての言及はこれまでなかった。本稿では、あくまでも考古学的な正当な手続きを踏まえて、この問題に正面から取り組んでみたいと考えるのである。

2 問題の所在

まず明らかにされるべきは、これまで雲南東部の石寨山文化などにおいて北方青銅器文化の系譜関係・影響関係が想定されてきたが（Chêng Tê-Kun1946、山本1974、Pirazzoli-t'Serstevens 1974、白鳥1977、高浜1977、童恩正1977）、そうした想定を成り立たせるためにも北方青銅器文化と石寨山文化との中間に位置する川西高原・洱海地域の青銅器文化を具体的に検討する必要がある。

これまでこの地域の青銅器文化は、中原系文化あるいは長江中流域の楚文化などの遺物との対応から年代の推定が行われてきた（小澤2007）。進んだ農耕社会の殷周社会に対し、遅れて発達した牧畜社会としての石棺墓文化の位置づけがあった。進んだ社会の物質文化から年代を推し量ることができるが、そこには伝播や伝世を経て時間的な隔たりが存在し、中原系の遺物の年代に比して、対応するこの地域の青銅器文化の年代はかなり遅いものであるという認識が一般的である。しかし、そのような既成概念によって当然なこととされている、進んだ社会と遅れた社会としての対比が果たして妥当なものであろうか。やはり本来的には両地域の青銅器文化やその社会の変遷をそれぞれに認識すること、すなわちそれぞれの地域の青銅器文化の編年軸を正当に作り上げて後に、それぞれの青銅器文化との併行関係を決めて行く必要がある。これまでのこの地域の青銅器文化の評価は、この地域の青銅器文化の編年軸を作ることなく、中原系遺物や楚系遺物・巴蜀遺物などから一方的に年代を決めることに

よって、その青銅器文化を評価するものであった。ここに、この地域の青銅器文化を考えるに当たっての最も大きな問題があると考えられる。

具体的に本地域の青銅器関係の論説を紐解くならば、まず銅劍の編年を挙げることができる。童恩正が銅劍の編年観を体系的に表したのが最初であるが、その変化の観点は、柄が中空で鏜である格がないものから、山字形の格が出現し、それが発達し、さらに劍身が鉄器化する変化にあった（童恩正1977）。この考え方をさらに前進させたのが張増祺である（張増祺1983）。張は銅劍の柄の文様に着目し、以下のような型式分類とその変遷観を示した。童恩正が最も古いとしたものと、山字形格が出現しながら柄に文様がないものをA式として、最も古い段階に位置づけた。続いて柄に螺旋文が出現するものをB式、さらにその螺旋文が太くなる段階をC式とした。そして螺旋文が穀粒文に変化する段階をD式、完全に穀粒文になった段階をE式とし、A式からE式までの変化を説明した。続いて両者の考え方をより体系化したのが、今村啓爾である（今村1985）。今村は童恩正の着目した格の型式変化と張増祺の観点である柄の文様の型式変化、さらに柄の形態の変化という、いわば三つの属性の相関関係により、第1期から第6期の変化を示した。さらに、副葬土器の検討や伴出遺物からこれらの変化が妥当であることを示している。

以上のように、1980年代までに、ここで示される山字形格銅劍の大略の変遷観に関しては、一定の前進とその到達点が達せられていたといえよう。町田章が再分類した山字形格銅劍の分類（町田2006）も、基本的にはこれまでの分類を踏まえたものとなっているが、劍首の形態に注目しながら、最新の資料の増補とともに、年代観の議論がより具体化している。また、川西高原と洱海地域を分けて型式分類している点は評価できるものの、両地域を統一した型式基準に関しては、基準が曖昧な点がある。現状でむしろ問題なのは、山字形格銅劍の成立の問題であり、山字形格銅劍以前の青銅器の位置づけであろう。山字形格銅劍をふくめたこの地域の青銅器文化全体の変化の方向性に関する議論が具体的に為されないままにいた。そしてそれらの系譜関係とともに、実年代の問題が青銅器文化全体を通じて行われていないことにある。さらには山字形格銅

劍が山字形格鉄劍に変化するように、鉄器化の問題を含めて、総合的に検討されるべきである。

わたしは、この山字形格銅劍成立以後の石棺墓文化における副葬土器の編年に関して、既に論攷として発表しており（宮本2009）、その変遷観とこれまでに達成された山字形格銅劍の編年観とは矛盾のないものである。副葬土器の編年からは、こうした山字形格銅劍成立以前の問題に踏み込むことが可能である。今村啓爾が問題にした最古の銅劍に関する位置づけと、その内部での型式分類と変遷観の設定が必要なのである。

このようにして、当該地域の大枠の青銅器の変遷を明らかにすることができる。以上に示した研究上の問題の設定とそれを解決するための方法に基づき、以下に当該地域の青銅器の変遷を述べて行きたい。

3 西南青銅器文化出現期の問題

当該地域の青銅器文化の成立とその系譜を考えるにあたっては、その成立期について押さえておく必要がある。すなわち、後に述べる青銅器の変遷を扱うにあっても、その基点を位置付けておかなければ、相対的な青銅器の変遷を把握できたとしても、それを年代軸のどこに納めて良いか理解できないからである。

この地域で最古の青銅器が存在した遺跡として知られているのが、川西高原の南端に位置付けしうる雲南省劍川県海門口遺跡である。C14年代値から1970年代には殷代後期に遡る青銅器として知られていたが、その年代値と青銅器の共伴関係の是非を含めて、年代値の扱いに疑問を抱く研究者も多かった。しかし、近年行われた第3次調査による多層位的な発掘によって、改めてその年代観が妥当であることが示されている（雲南省文物考古研究所ほか2009）。3800～3200年前の海門口第2期の末には銅器が出現し、3100～2500年前の海門口第3期には青銅器が普及するというものであり、二里頭期から殷代前期に銅器が出現し、殷代後期～西周前期には青銅器が普及ということが明らかとなっている。問題とすべきは、このような銅器・青銅器文化がどのような系譜

で出現したかにある。

私がここで注目したいのは、この海門口遺跡第1次・第2次調査で発見された青銅斧に関してである（雲南省博物館1995）。片刃のいわゆる鑿と呼ばれるものであるが、裏面が平坦をなしており、一見すると片刃で製作されたものかと思わせるものである（図1-1）。詳しく実見すると、裏面の平坦部にはその両側端の一部に線状の切断痕（図2）が認められる。その切断痕は従来ここに青銅器の一部が存在していたことを示しており、決して青銅を流す際の湯口のようなものではない。そうした部分に繋がる青銅器の形態といえば、私が半ソケット式銅斧と呼ぶ銅斧（図3）の側面部がその切断部分に相当し、ソケット式銅斧が半割されたものと考えられるのである。この半ソケット式銅斧はアンドロノヴォ文化を始めとし中国西北部の四壩文化に認められるなど

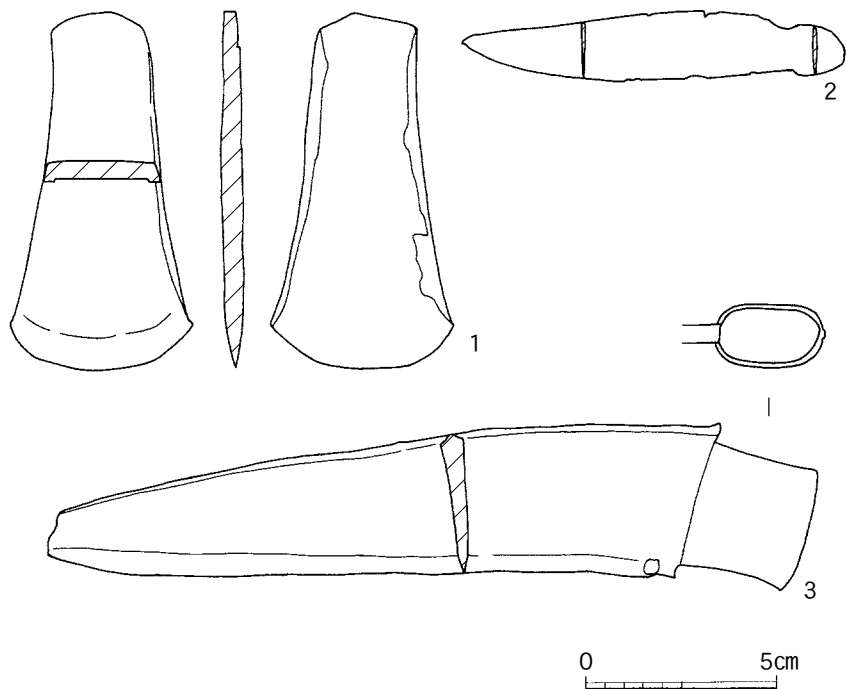


図1 海門口遺跡の青銅器（縮尺1/2）



図2 海門口遺跡出土銅斧

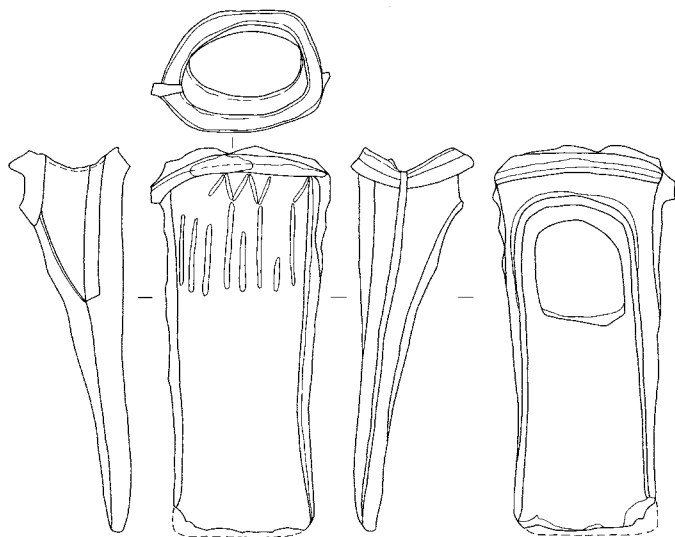


図3 甘肅省干骨崖遺跡出土半ソケット式銅斧（縮尺1／2）

初期の北方青銅器の典型的銅斧である（林澗2002）。時期的には二里头期・二里岡期に平行する長城地帯青銅器文化第2期に相当する（宮本2008）。また、半ソケット式銅斧の再加工品と判断されるならば、こうした青銅器は中国西北部などを介した北方青銅器文化にある。また、長城地帯青銅器文化第2期に相当するのであれば、海門口第2期の銅器文化時期のC14年代とも矛盾しない。すなわち、長城地帯青銅器文化第2期に川西高原から海門口遺跡の立地する雲南西部の山岳地帯では、北方青銅器文化の系譜を引くようにして青銅器文化あるいは青銅器が成立し、自家生産が始まったというふうに解釈できるのである。

この他、海門口遺跡からは青銅刀子（図1-2）や青銅戈（図1-3）が出土している。刀子は鍛打製であり、その形態や製作技法からも長城地帯青銅器文化第2期の北方青銅器文化に系譜を見出すことができるであろう。一方、青銅戈は青銅鎌と報告では表記されているものであるが（雲南省博物館1995）、鎌といった農耕に係わる生産道具ではなく、武器と認定すべきものである。報告では石寨山7号墓のもの（雲南省博物館1959）と類似するとするが、身部の形態には大きな差が見られ、また銜部に石寨山7号墓は釘孔を有しているなど、大きく異なっている。戈は川西高原の四川省炉霍県卡莎湖遺跡（四川省文物考古研究所・甘孜藏族自治州文化局1991）などの出土品に見られるような有銜戈が、川西高原の青銅器文化前半期の特徴を示しており、有銜の部分としてのソケットがこの海門口遺跡のものにも認められる。そのような推測からすれば、海門口遺跡のものも青銅戈と認定すべきものであり、川西高原の青銅戈の変異型として捉えうる。有銜青銅戈は長城地帯青銅器文化第2期のものであり、海門口遺跡の青銅戈も長城地帯青銅器文化第2期ないし第3期に併行するものであると想定される。ともかく、海門口遺跡の青銅器が北方青銅器文化の系譜にあり、その始まりが長城地帯青銅器文化第2期に遡るものであることが確認できたのである。

4 青銅器文化の変遷

既に問題設定で述べたように、山字形格銅劍の編年は今村啓爾によって大綱はできあがっており（今村1985）、むしろ青銅器文化の変遷全体の中で山字形格銅劍を位置付けるべきであろう。すなわち今村啓爾が山字形格銅劍出現期とした1期に平行ないし先行する段階をどう考えるかにある。既に副葬土器の編年を別稿（宮本2009）にて示しているが、青銅器の内容から見ると、石棺墓内に副葬土器と共伴する段階と共伴しない段階に明瞭な差異が見られる。副葬土器が共伴する段階には山字形格銅劍が伴い、山字形格銅劍が単独で副葬土器をもたない墓葬に副葬されることはない。両者に負の相関があることは明確である。これは特に墓群を単位とした副葬土器と山字形格銅劍との共伴関係に於いて明確に示すことができる。今村が山字形格銅劍1期とした雲南省徳欽永芝採集品（雲南省博物館文物工作隊1975）には副葬土器が伴う可能性あるが、その副葬土器には三耳罐など胴部最大径が胴部中央より若干上部に位置したものが

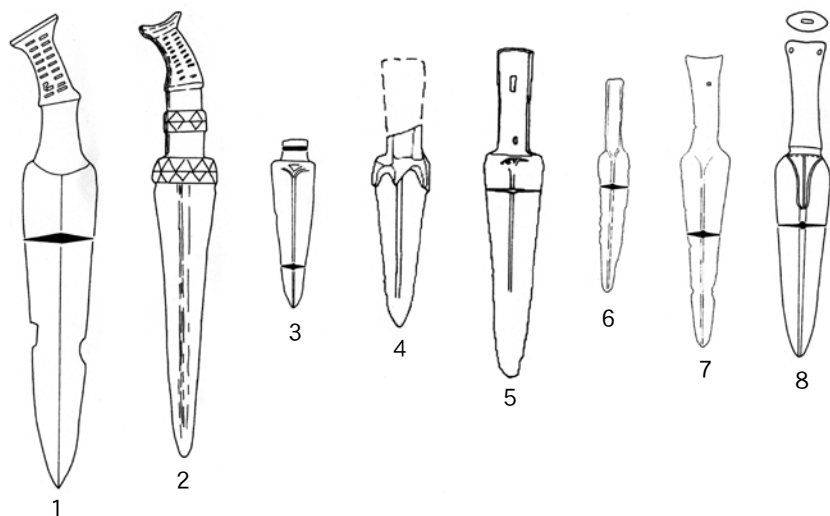


図4 山字形格銅劍出現期の銅劍（1 納古M22、2 瓦西溝口M2、3 永芝、4 瓦西溝口M5、5 瓦西溝口M3、6 中布M1、7 中克、8 永芝、縮尺1/6）

あり、副葬土器第Ⅱ段階（宮本2009）に平行すると考えられる。

さて、こうした山字形格銅劍が如何にして出現したか、とりわけ山字形格が如何にして成立したかについては明確ではないが、山字形格銅劍の最古段階のものでも柄が一部中空化（図4-4～8）していることに注目したい。これはその後、柄の端部に孔が空いたり、あるいはより精巧に中空化していく系譜関係の祖形を示している。この中空化したものは、長城地帯青銅器文化第4期に特徴的なA2式（宮本2000）のカラスク式銅劍と同じ特徴を持っている（宮本2007）。町田章も山字形格銅劍より古い段階に雲南省中甸県中布1号墓（図4-6）や中克出土のもの（図4-7）をあげている（町田2006）。これらは山字形格を持たず、劍身には脊を持ちながら、柄が断面方形であったり楕円形の中空を為すものである。中布の他の墓葬人骨から測定されたC14年代が西周期のものであること（雲南省文物考古研究所2005）からも、町田はこれらの短劍を西周・春秋時代に位置づけている。実年代の問題は後に触れることとしながらも、相対的にこのような中空の柄をもった青銅短劍を、山字形格銅劍より古い段階の銅劍として位置づけうるであろう。これをここではプロト山字形格銅劍と呼んでおきたい。そしてその祖形として、長城地帯青銅器文化第4期のA2式青銅劍をあげることができるであろう。A2式青銅劍の柄の中空部が、プロト山字形格銅劍の柄の中空部に繋がり、さらに山字形格銅劍の柄の中空に系譜的に繋がると考えることができる。

プロト山字形格銅劍と山字形格銅劍を繋ぐ意味で興味深い資料が、四川省宝興県瓦西溝口の資料である（宝興県文化館1982）。その一つは瓦西溝口3号墓の資料（図4-5）で、中布1号墓と同じように劍身に脊を持ち柄が断面方形の中空を為すものである。もう一つが瓦西溝口5号墓の資料で、山字形格銅劍を為すが、柄が断面方形の中空を為すもの（図4-4）であり、山字形格銅劍1式の柄で螺旋文を持たない断面円形の中空銅柄とも異なっている。柄の形態だけで言えば、プロト山字形格銅劍と山字形格銅劍1式の間を為すものである。プロト山字形格銅劍である瓦西溝口3号墓のもの（図4-5）も、鏝は存在しないが、柄と劍身の境に一部連弧状に盛り上がった部分があり、鏝として

の機能を高めるため、こうした部分が山字形格になった可能性もある。また、山字形格銅剣1式の最古段階ともいえる瓦西溝口5号墓のもの(図4-4)は、剣身と鏢から柄部分が別鑄であり、剣身を鑄造後、柄を鑄造する際に差し込みによって鑄だされた可能性を想定できる。嘗て張増祺が最古式とした(張増祺1983)雲南省徳欽県永芝出土の戈(雲南省博物館文物工作隊1975)も、その形態(図4-3)は瓦西溝口3号墓(図4-5)の剣身部分と剣の基部側の連弧状文様などを含め極めてよく似ており、戈としたものは剣身部分であり、これに木製の柄ないしあるいはその後に柄部分が再鑄造される可能性が想定できる。したがって、これも瓦西溝口5号墓と同じく最古式の山字形格銅剣と位置づけできるのである。

雲南省徳欽県納古22号石棺墓出土の曲柄銅剣(図4-2)と銅矛は一括遺物である(雲南省博物館文物工作隊1983)が、さらに副葬土器を共伴しているものの、残念ながら遺物が図示されていない。同じ墓群の副葬土器は相対的に副葬土器第I段階の特徴を示しており、22号墓もほぼ同じ段階のものであろう。雲南省中甸県中布1号墓(雲南省文物考古研究所2005)のプロト山字形格銅剣(図4-6)は、中布石棺墓群が副葬土器第I段階ないし第II段階の墓群であること(宮本2009)からも、曲柄銅剣とほぼ同時期に位置付けることができ、北方青銅器文化の青銅器変遷とほぼ同じであることは重要な事実である。

四川省宝興県瓦西溝口2号墓から、このような曲柄銅剣と共に曲柄を為す青銅戈が出土している(宝興県文化館1982)。曲柄銅剣は納古22号墓と同様に川西青銅器文化第2段階のものと考えられるが、青銅戈はそれを遡る段階のものであろう。あるいは、瓦西溝口2号墓の共伴例を基準とするならば、曲柄銅剣は川西青銅器文化第1段階に既に出現していた可能性がある。一方で瓦西溝口3・4号墓からは曲柄銅戈とともにプロト山字形格銅剣が出土している。4号墓の場合一つの墓壙内出土と確認されたものではないことから、必ずしも共伴関係は確認されないが、3号墓は確実な共伴関係があり、プロト山字形格銅剣も川西青銅器文化第1段階まで遡る可能性もある。

このような曲柄の青銅戈(図6-2)は、有蓋戈(図6-1)とともに無副

葬土器墓である四川省炉霍県卡莎湖石棺墓（四川省文物考古研究所・甘孜藏族自治州文化局1991）から出土している。さらに同じ無副葬土器墓である四川省炉霍県晏爾龍石棺墓から、このような青銅戈がさらに変形したものとして出土している。有銜戈は北方青銅器文化第3段階に中国西北部を中心として流行するものであり（宮本2008）、その一端は殷墟文化にも影響を与えている。したがって卡莎湖遺跡にみられる有銜戈は、長城地帯青銅器文化第3段階の系譜に生まれたものであると考えられるが、この曲柄の戈は、戈と同時期の北方青銅器文化にみられる曲柄銅劍と合体したような印象を与えるものであり、川西高原の独自の青銅戈ということが言えよう。これを川西型銅戈と呼ぶとすれば、その大きな特徴は、銅戈の身部の背面が段を為すところに特徴がある。卡莎湖石棺墓より相対的に新しい晏爾龍石棺墓（宮本・高大倫・湯飛2009、唐飛・金国林2009）では、この背面の段部が次第に退化する形で、全体が刀子のような形態に退化していく。このように川西型銅戈の形態変化は次第に明器化していくように変化していく。無副葬土器段階の卡莎湖石棺墓や晏爾龍石棺墓は、川西高原青銅器第1段階に位置づけられるものであり、長城地帯青銅器文化第3段階に相当している。さらに、この段階の青銅器が戈と矛を中心に構成されていることに特徴があるとともに、まだ劍が出現していない段階と規定できる。北方系の有銜戈からさらにこの地域独自の川西型銅戈を在地的に生産しており、地域的な青銅器文化展開期ということが言えるであろう。なお、川西型銅戈の詳細な変遷過程については、晏爾龍石棺墓の正式報告が出されてから、再検討することにした。

さて、山字形格銅劍の変遷については、既に学史で述べたような属性分析でその変遷を示した今村啓爾のもの（今村1985）が最も理解しやすいものである。さらに近年の資料を加えて再検討した町田章の編年（町田2006）も存在するが、今村の編年案を軸にここでは銅柄部の形態・文様変化を中心にして、型式変遷を示しておきたい。また、今村が山字形格銅劍の変遷を「期」という区分で示したが、ここでは型式で示し（図5）、その型式名は今村の「期」にほぼ相当している。なお、ここでは、型式分類するに当たって設定した属性単位が、必

ずしも今村の「期」と連動していない場合があることを、あらかじめ了解していただきたい。

山字形格銅劍1式(図5-1)は、既に述べた初現期のものである。無文の中空の柄に、連弧文状の格がとりつくもので、いわゆる山字形格に至っていない段階である。雲南省徳欽県永芝のもの(雲南省博物館工作隊1975)が代表的な銅劍である。永芝のうち「戈」と報告されたもの(図4-3)も、銅劍の劍身部と考えるが、既に述べた瓦西溝口5号墓の例(図4-4)のように、柄と劍身が分けて鑄造され、溶接ないし差し込みによって分けて鑄造される技術工

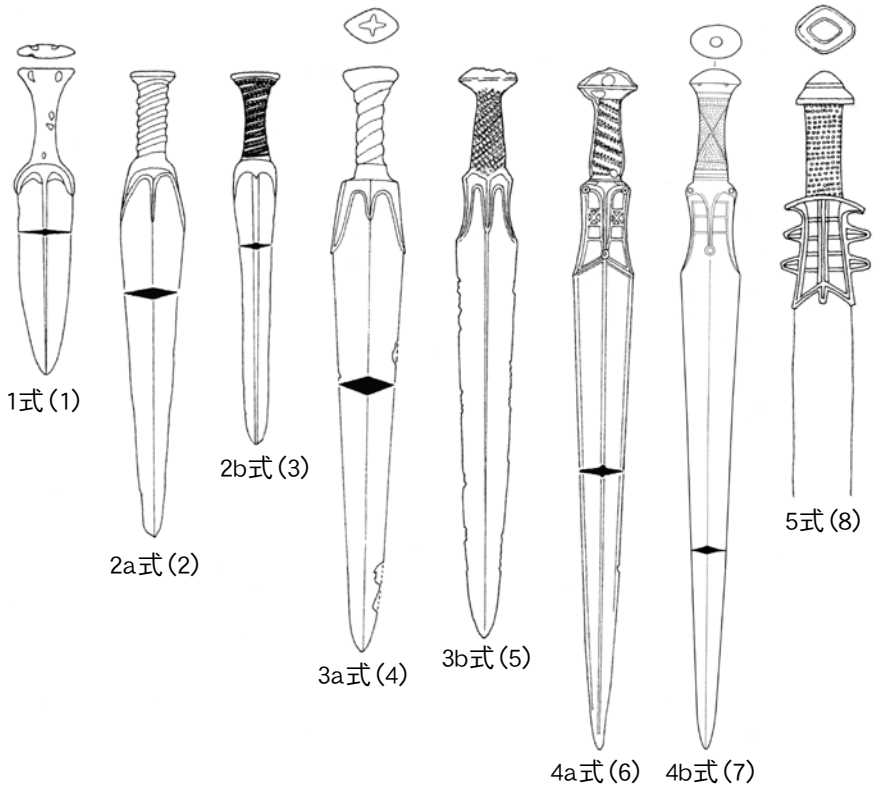


図5 山字形格銅劍の型式(1永芝、2塩源、3永芝、4牟托M1、5宝興城内、6双塔山M12、7塩源、8茂県城東A区CM1、縮尺1/6)

程が既に存在していた。

山字形格銅劍 2 式 (図 5-2・3) は、中空の柄に螺旋文が施され始める段階であり、山字形格が定形化し始める段階である。山字形格の山字形文のうち、両端が中心部より完全に延びる形態に変化している。この 2 式はさらに螺旋文の特徴から細分が可能である。螺旋文が単なる螺旋からなる 2 a 式 (図 5-2) と、螺旋文内を組紐状に細かな刻目が施される 2 b 式 (図 5-3) である。

山字形格銅劍 3 式 (図 5-4・5) は、中空の柄の端部が十字形の樓孔を持つものが川西高原では多いが、洱海地域では円形の孔のままの場合が多い。山字形格の山字文の両端が外側にそり始める段階である。町田章は山字形格の肩部が丸みを帯びる丸肩と角張る怒り肩に区分するが (町田 2006)、ここではその細分は用いず、3 式として重要なのは山字形文が外側に反ることを最も大きな分類基準とする。外側に反って外反する山字形文は、山字形文の縁に沿って二重の稜線が形成されるものが一般的である。また、螺旋文は組紐文が認められない単なる螺旋文の 3 a 式 (図 5-4) と組紐文をもつ螺旋文の 3 b 式 (図 5-5) に分かれる。どちらも 2 式に比べ螺旋文が太めになる傾向にある。3 b 式は、2 b 式に比べ太めの螺旋文に組紐文を意匠化したように刻目が施されている。この型式段階から、同じ銅柄の型式からなる銅柄鉄劍が出現する。名称としては山字形格鉄劍 3 a 式となる。銅柄の型式で名称を規定するものである。銅柄鉄劍は鍛造鉄による劍身を製作した後に、柄部を鑄造する際に劍身を差し込みながら鑄造するものと想定されるが、こうした差し込み技術は既に山字形格銅劍 1 式段階から存在する。

山字形格銅劍 4 式 (図 5-6・7) は、3 式の山字形文がより意匠化するようになり、山字形文を横に繋ぐように横棒が現れ、幾何学文様化する。また柄端部の十字形樓孔は消失し、十字形樓孔が痕跡化して文様化する場合もあるが、柄が中空であることは変わらない。4 式は柄の文様によって細分できる。刻目螺旋文をもつ 4 a 式 (図 5-6) と、刻目螺旋文が変化して穀粒文となった 4 b 式 (図 5-7) である。刻目螺旋文が意匠化したのが穀粒文と考えられ、山字形格銅劍の柄部がより意匠化していく傾向にある。この段階には銅柄鉄劍も存

在するが、これと同じように銅剣においても、剣身と銅柄を分けて鑄造する場合がみられる。これは銅柄の文様をより複雑化することによって必要な工程であったと考えられる。

山字形格銅剣5式(図5-8)は、山字形文がより意匠化し、山字形文の外縁部にも突線文がとりついたり、地文が施されるなど、より複雑に文様化した段階である。銅剣よりも、銅柄鉄剣として利用される場合が多い。

一方、川西高原青銅器文化の特徴として、柄がT字形の一鑄式の銅剣が川西高原青銅器文化第3段階・第4段階に認められる(図6-7・11)。これは北方青銅器文化で銅剣に加えて予備的につく護身用の小型の剣を意識して在地的に製作されたものと推定できる。出土地が茂汶県營盤山石棺墓(茂汶羌族自治州文化館1981・1985)や茂県牟托1号墓(茂県羌族博物館・阿壩藏族羌族自治州文物管理所1994)など岷江上流域に限られている。この地域では、石棺墓の構造においても地域的な展開を示しており(宮本2009)、これらの青銅剣も川西高原青銅器文化内でのさらに地域的な青銅器の展開として理解できよう。同じく牟托1号墓からは柄に節をもちさらに獣首形で曲柄を為す特異な銅剣が出土している(図6-10)。町田章は巴蜀式銅剣との系譜関係を考えているが(町田2006)、川西青銅器文化第2段階にみられる曲柄銅剣の系譜関係にある岷江上流域の地域的な青銅器の展開と理解できる。

5 川西高原青銅器文化と実年代

川西高原青銅器と洱海系青銅器を5段階に区分してきた(図6)。そして、この5段階の変遷と既に示した副葬土器の変遷(宮本2009)との対応を示したのが、表1である。また、これらの対応関係にさらに石棺墓型式との対応から、川西高原の石棺墓文化を6期に区分した(宮本2009)。以下、この石棺墓文化分期にしたがって実年代を考えて行くことにしたい。

石棺墓文化第1期は、川西青銅器第1段階の無副葬墓段階である。川西青銅器第1段階は、海南口第2期末～第3期前半のものを含む段階である。海南口遺跡での半ソケット式銅斧が長城地帯青銅器文化第2期のものであれば、二里

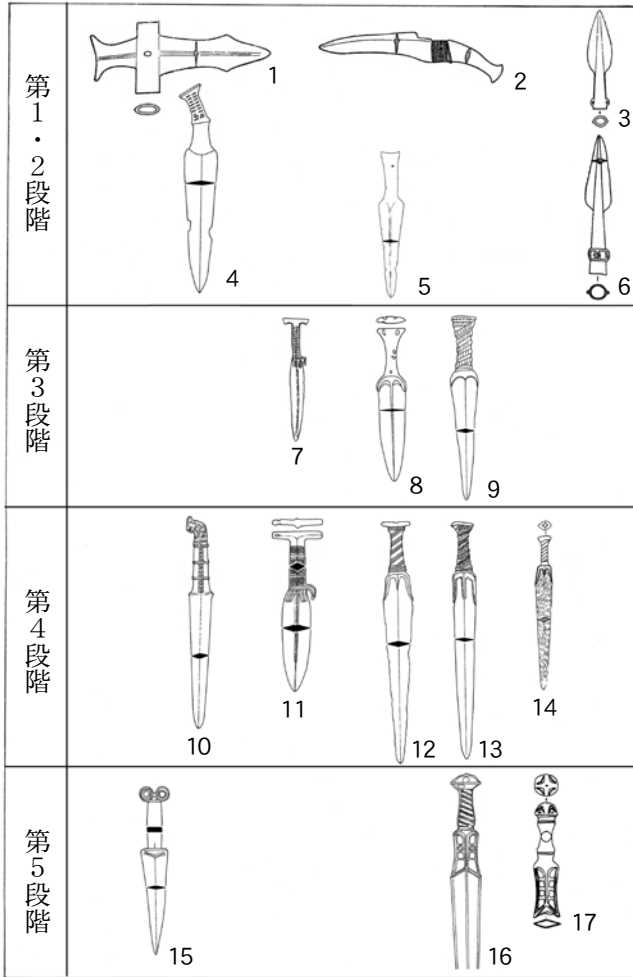


図6 川西高原・洱海系青銅器の編年（1 卡莎湖、2 卡莎湖、3 卡莎湖、4 納古、5 中克、6 納古、7 營盤山M 3、8 永芝、9 塩源、10~12・14 牟托M 1、13 草科碓窩坪、15 塩源、16 双塔山M 12、17 宝興採集、縮尺 1/12）

表1 川西高原青銅器の変遷と石棺墓文化分期

石棺墓文化分期	石棺型式		副葬土器段階	青銅器段階	年代
第1期	I A 1 I A 2	II A II B・C	無土器	第1段階 有蓋戈	前13-10世紀
第2期		I B	I 段階	第2段階 曲柄劍	前9-8世紀
第3期		I C	II 段階	第3段階 山字形格劍1・2式	前7-6世紀
第4期		I D	III 段階	第4段階 3式	前5世紀
第5期	I A 3		IV 段階	第5段階 4式	前4-3世紀
第6期			III V 段階	第6段階 4b式・5式	前2-1世紀

頭文化期まで遡る可能性があるが、この銅斧自身が再加工されているものであり、また海南口第2期末のC14年代を参考にすれば、殷後期併行期の長城地帯青銅器文化第3期まで下げて考えよいであろう。卡莎湖遺跡の有蓋戈を川西青銅器第1段階と考えたが、有蓋戈や有蓋斧は長城地帯青銅器文化第3期に普及するものであり、卡莎湖石棺墓で伴出する銅矛などもその段階のものである。長城地帯青銅器文化第3期は殷墟期に併行するものであり、前13~11世紀に相当している。また、同じ無土器副葬墓葬で石棺墓文化第1期と考えた晏爾龍8号石棺墓の青銅戈（唐飛・金国林2009）は、西周前期の陝西省宝鶏市竹園溝13号墓出土の青銅戈（宝鶏市博物館1988）と類似している。特に、「内」側に近い身部に半円形の突出部を持つ点は両者が共通した特徴であり、前10世紀の同年代のものであることが示される。そこで、川西青銅器第1段階の石棺墓文化第1期を前13~10世紀と考えることができる。なお、川西高原青銅器第1段階には、共伴関係から曲柄銅劍やプロト山字形格銅劍が存在している可能性がある。特に前者は、長城地帯青銅器文化との関係からみてもこの段階に既に出現していた可能性が高い。一方で、プロト山字形格銅劍は長城地帯青銅器文化との関係でみれば、相対的に遅い段階であり、川西青銅器第1段階に出現している可能性を否定しないまでも、その主体を川西高原青銅器第2段階としてお

きたい。

川西高原青銅器第2段階は、プロト山字形格銅剣や曲柄銅剣の段階である。町田章は、プロト山字形格銅剣である雲南省中甸県中布1号墓出土銅剣などを西周・春秋期に位置づけているが、これは山字形格銅剣の出現を戦国期に求めることからこのように幅広いものになっている。本論では、プロト山字形格銅剣の柄が中空である銅剣の特徴が、カラスク式銅剣などの長城地帯青銅器文化のA2式銅剣に求められ、西周期に併行する段階のものとする。長城地帯青銅器文化第4期に相当する段階である。曲柄銅剣は長城地帯青銅器文化第3期に出現するが、その退化形は長城地帯青銅器文化第4期にも存続しており、川西高原青銅器第2段階は長城地帯青銅器文化第4期に併行するものとする。すなわち、副葬土器Ⅰ段階である石棺墓文化第2期（川西高原青銅器第2段階）は、前9・8世紀である。

川西青銅器第3段階が山字形格銅剣1・2式段階である。山字形格銅剣1式は、四川省茂汶县城関D区7号墓（四川省文管会・茂汶県文化館1983）にみられるが、その副葬土器である双耳罐は副葬土器Ⅱ段階に相当する。また、雲南省徳欽県永芝においても、山字形格銅剣1式が採集されている（雲南省博物館文物工作隊1975）。永芝出土刀子に関して、高浜秀は、内反り刀子であることを指摘して、長城地帯青銅器文化の刀子に最も近いものであり、それらの伴入品である可能性を述べている（高浜1977）。その刀子は南山根に近いものであり、春秋前期の8世紀以降とすることができるであろう。次の川西青銅器第4段階との関係からして、石棺墓文化第3期は、前8・7世紀に比定しておきたい。

なお、プロト山字形格銅剣が出土した雲南省中甸県中布墓地において、中布2号墓の副葬土器は副葬土器Ⅰ段階と考えられる。中布2号墓の人骨は、C14年代が前1008～833年と測定されている。同じく中布6号墓は副葬土器Ⅱ段階であり、その人骨は前986～813年というC14年代測定がなされている（雲南省文物考古研究所2005）。ここでの実年代推定と比べ、やや古い年代が示されているが、大きく矛盾を来すものではない。

川西青銅器第4段階は山字形格銅劍3式である。この段階は副葬土器Ⅲ段階に相当し、四川省茂県牟托1号墓の一括資料（茂県羌族博物館・阿壩藏族羌族自治州文物管理所1994）がこの段階に相当する。牟托1号墓には山字形格銅劍3式が相伴しており、これらの併行関係が認められるところである。また、雲南省徳欽永芝2号墓において、山字形格銅劍3a式と単耳罐の副葬土器Ⅲ段階が相伴している（雲南省博物館文物工作隊1975）。

一方、牟托1号墓には中原系の青銅器彝器が伴っており、その年代は春秋後期の前6世紀前半とすることができよう。しかし、報告者を含めこれら中原系青銅彝器は伝世されたものとし、報告では牟托1号墓の年代を戦国中期と後期の境に下げている。問題なのは、牟托1号墓から山字形格銅劍3式と同じ型式の特徴を持つ銅柄鉄劍が存在しているからである。町田章も自信の型式で言うⅡa式山字形格銅劍を戦国前期から中期に位置づけながらも、同じ型式である銅柄鉄劍Ⅱa式は戦国後期の古い段階に置き、石寨山文化にみられる銅柄鉄劍の始まりと位置づけている（町田2006）。これらは鉄劍の普及が前漢になってから一般的であるという見解（徐学書1999、謝輝・江章華2002）が、中国考古学界においては一般的であるところから、その年代的遡及を躊躇することにある。これは鉄製武器の普及が中原では前漢に下ることと相関した議論であるが、川西高原の鉄器化を必ずしも中原との関係で理解する必要はないであろう。北方青銅器文化において鉄器化は比較的早く、新疆などでは鉄器化が長城地帯青銅器文化第3期の殷後期に遡る（韓建業2007）。また、中原でもこうした関連の中で前9～8世紀には銅柄鉄劍や玉柄鉄劍が存在する。甘肅省靈台县景家莊1号墓（図7-2、劉得禎・朱建唐1981）や河南省三門峡市虢国墓2001号墓（図7-1、河南省文物考古研究所・三門峡市博物館工作隊1999）の遺跡の事例がよく知られる例である。

さらに注目すべき事例としては、甘肅省礼県大堡子山Ⅲ1号墓の例が挙げられる（早期秦文化聯合考古隊2008）。出土した青銅彝器は陝西省八旗屯B27号墓と同じ型式の特徴を持っており、その年代は春秋後期前半の前6世紀後半の秦墓である。ここから銅柄鉄劍が出土している（図7-3）。銅柄は中空であ

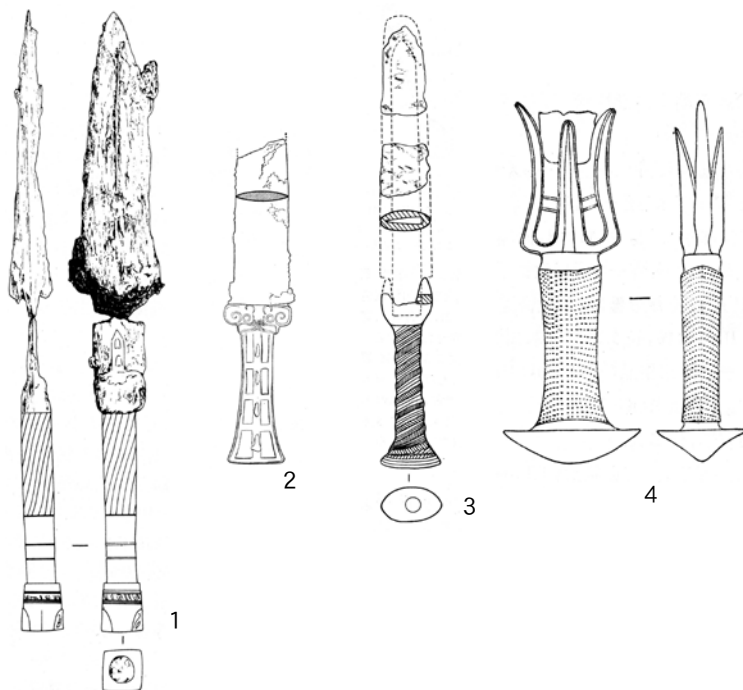


図7 銅柄鉄剣の諸例（1 號国墓M2001、2 景家莊M 1、3 大堡子山ⅢM 1、4 楊郎第1 地点M12、縮尺1／4）

り組紐状の螺旋文からなるものであり、山字形格でない点を除くと、銅柄の型式は山字形格銅劍2b式に一致している。ただし、格は一部破損しており、残された側面は山字形格2式と同じ形態であり、全体も同じ2式の形態になる可能性も残されている。これは、おそらく鍛造による鉄劍身が銅柄に挿入するように装着されている。これが単なる装着なのか、あらかじめ作られた劍身を差し込み状にして銅柄部を鑄造したものか、あるいは劍身と銅柄が溶接なのかは、報告には記載がなく不明である。しかしながら技術的には川西高原で出土する銅柄鉄劍と全く同じものであるとすることができよう。何よりも銅柄の螺旋文が山字形格銅劍2b式と型的に一致しているということは、両者が同時期であることを意味していよう。少なくとも山字形格銅劍2b式と型的に同

じ銅柄銅剣が存在することは、川西高原においても山字形格銅剣3式の時期に銅柄鉄剣が成立していても何ら問題はないのである。そしてその年代が前6世紀後半を基点とするものであることが重要である。

これまで鉄製であることから年代が下げられていた銅柄鉄剣の年代を再吟味する必要がある。極論は、鉄剣が普及するのは前漢以降という徐学書らの考え方（徐学書1999）があるが、これは中原での鉄製武器の普及を根拠としたものであり、この地域に当てはまらないということをまず認識すべきである。さらに大堡子山Ⅲ1号墓のような鉄剣が、この例を除いて、先に示した西周末～春秋前期の河南省虢国墓2001号墓や甘肅省景家莊1号墓、春秋後期の陝西省益門村2号墓（宝鷄市考古工作隊1993）など中原でも中国西北部と接するような地点から出土していることからみれば、こうした技術が中国西北部を介して中原に流入したものと想定できよう。これらは長城地帯青銅器文化第5期段階に相当するが、既に指摘したように、新疆では長城地帯青銅器文化第3期には鉄器が始まっている。鍛造鉄器の技術は早くに中国西北部に始まっており、こうした技術が銅柄鉄剣という形で中国西北部から一方では中原へ、一方では川西高原へと技術伝播していくと仮定すれば、何も鉄器の存在を以て年代を下げる必要性ないと考えられる。先に指摘した山字形格銅剣3式段階に川西高原でも銅柄鉄剣が始まっていたといえよう。ここではこの銅柄鉄剣を、柄の型式では山字形格銅剣と同じことから、銅剣の型式名をそのまま使って山字形格鉄剣3式と呼んでおきたい。以下に、山字形格鉄剣4式や5式と呼ぶものも、山字形格銅剣と同じ銅柄の型式的特点を持つものを指している。さて、このように山字形格銅剣3式と山字形格鉄剣3式が同時期に出現していることは、すでに今村啓爾も指摘していたことであった（今村1985）。なによりも茂県牟托1号墓で両者が相伴していることこそが、そのことを如実に物語っており、町田章のように両者の年代差を考える必要はないであろう。さて、この牟托1号墓からは前6世紀前半の中原系青銅彝器が出土していた。山字形格鉄剣3式の年代の鍵となる大堡子山Ⅲ1号墓は前6世紀後半の墓葬である。これが山字形格銅剣2b式の年代であるとすれば、前6世紀後半には鉄剣の技術が川西高原にも

流入していた可能性がある。川西高原青銅器第3段階の実年代をも考慮しながら、前6世紀後半の山字形格銅劍2b式に続く、山字形格鉄劍3式が出現する川西高原青銅器第4段階（石棺墓文化第4期）を前5世紀と考えておきたい。

なお、町田章が年代を下げざるを得なかった別の理由は、自身の編年したI a式巴蜀式銅劍（町田2006）がこの茂県牟托1号墓でも共伴していたからである。しかし巴蜀式銅劍が西周前期の柳刃短茎銅劍の系譜を引くことは明らかであり、町田章もI a式巴蜀式銅劍を含む巴蜀式銅劍の出現年代を春秋後期ないし戦国前期と考えている（町田2006）ことから、川西高原青銅器第4段階を前5世紀と考えることに大きな矛盾はないと言えよう。このように山字形格銅劍と巴蜀式銅劍は石棺墓から共伴する場合が多く、巴蜀式銅劍の実年代観から山字形格銅劍の実年代を下げる傾向にある。巴蜀式銅劍と西周前期にみられるその祖形との実年代の開きとともに、その年代の根拠が曖昧な点からも、今後、巴蜀式銅劍の実年代観も再考する必要があるであろう。

続く川西高原青銅器第5段階の実年代はどうであろう。寧夏固原地区で出土した銅柄鉄劍が注目される。これは寧夏固原楊郎第1地点12号墓から出土したもの（寧夏文物考古研究所・寧夏固原博物館1993）で、川西高原の銅柄鉄劍の特徴をよく備えたものである。川西高原からの搬入品である可能性が高いが、寧夏周辺ではこの他比較的多数の銅柄鉄劍が知られており（羅豊1993）、甘肅から寧夏にかけてもこのような銅柄鉄劍が製作されていた可能性が残されている。楊郎第1地点12号墓の北方青銅器は、私の編年で言うオールドス青銅器第4期で、前4世紀前半に相当している（宮本2000・2002）。問題の銅柄鉄劍（図7-4）は、柄の文様が穀粒文に変化しているものであり、山字形格の形態からも山字形格鉄劍4b式に属するものである。山字形格鉄劍4b式すなわち山字形格銅劍4b式の年代が、楊郎第1地点12号墓の年代から前4世紀にその年代の一点が存在すると言することができるであろう。なお、寧夏周辺では、山字形格鉄劍3a式が寧夏中衛県狼窩子坑3号墓や甘肅省慶陽県五里坡で出土している（羅豊1993）。また、山字形格鉄劍4b式が楊郎第1地点12号墓以外でも、寧夏狼窩子坑1号墓、彭陽県官台村、固原余家村、固陽県馬莊から出土してお

り（羅豊1993）、この段階の川西高原と甘肅から寧夏にかけての交流が認められる。なお、山字形格鉄剣3a式が出土した狼窩子坑3号墓は戦国前期、山字形格鉄剣4b式が出土した狼窩子坑1号墓はオルドス青銅器第4期以降に相当すると考えられ（宮本2002）、川西高原における山字形格鉄剣の年代比定に矛盾しないものである。

また、アキナケス形銅剣との系譜関係が推定される柄端部に円形の双円文が施される銅剣（図6-15）は、今のところ洱海地域を中心に分布している。柄端部が双円文をもつ銅剣は、長城地帯青銅器文化第6期（初期鉄器文化）に認められるものであり、双鳥文が崩れて双円文に転換したと一般的に理解できる。これを双円柄銅剣と呼んでおく。オルドス青銅器文化第4期にこのタイプの双円柄銅剣が認められること（宮本2000・2008）からも、川西高原青銅器第5段階にこのような双円柄銅剣が出現するであろう。四川省塩源老龍頭墓地でもこの双円柄銅剣が出土している（涼山彝族自治州博物館・成都文物考古研究所2009）。また、川西高原青銅器第5段階は副葬土器Ⅳ段階に相当するが、この段階の副葬土器を持つ四川省茂汶县城関C区8号墓には鉄釜や鉄罐が相伴している（四川省文管会・茂汶県文化館1983）。このような鉄製容器を前漢以降に下げる見方（謝輝・江章華2002）もあるが、このような鉄釜や鉄罐は戦国時代の義渠（甘肅東部）や戦国後期の秦墓に認められ（白雲翔2005）、前3世紀には存在するとすることができるであろう。したがって、川西高原青銅器第5段階（石棺墓文化5期）は前4～3世紀であると考えられる。

副葬土器第Ⅴ段階に相当する川西青銅器第6段階は、山字形格銅剣・鉄剣4b式が一部残存し、山字形格銅剣5式が主体となる段階である。この段階の実年代は、既に今村啓爾によって示されているように、相伴する貨幣などの漢系遺物の年代から推定できる（今村1985）。雲南省石寨山10号墓には山字形格銅剣4b式が副葬されているが、草様文鏡が相伴し、前2世紀の年代が与えられる。山字形格鉄剣5式が出土した雲南省李家山26号墓には武帝期以降に鑄造された五銖銭が相伴しており、おそらく前1世紀のものであろう。このように、山字形格銅剣4b式と5式の実年代から、川西青銅器第6段階（石棺墓文化第

6期)は、前2世紀～前1世紀と推定できよう。

6 川西高原石棺墓文化と北方青銅器文化

洱海系青銅器を含めた川西高原青銅器(図6)が、長城地帯青銅器文化第2期から併行し、長城地帯青銅器文化第2期や第4期との波動的な接触の中に、当該地域の青銅器の生成と展開が為されてきたことを述べてきた。長城地帯青銅器文化第3期にみられる有蓋斧や有蓋戈が、石棺墓文化第1期の有蓋戈の祖形であり、長城地帯青銅器文化第4期のA2式劍あるいはそれに遡って始まるB1式劍(曲柄劍)が石棺墓文化第2期の曲柄劍やプロト山地形格銅劍の祖形とすることができるであろう。これらは一定の系譜関係として押さえることはできるものの、石棺墓文化内での青銅器生産においては、独自の特色が既に備わっており、大きく文化変容していることができ、両地域の青銅器文化の接触は直接的なものと言うよりは、青海地域や固原地域などを介してより複雑な動きが想定できる。

その点で、石棺墓文化第3期の山字形格銅劍2b式の銅劍の柄に見られる螺旋文の成立の問題、石棺墓文化第4期の山字形格銅劍3式にみられる鉄劍化の動きに関しても、西北地域の北方青銅器文化との一定の接触によって生み出された可能性がある。特に鉄劍化で注目した甘肅省礼県大堡子山Ⅲ1号秦墓出土の銅柄鉄劍の柄部は、山字形格銅劍2b式と同一の螺旋文を帯びた中空の柄を呈しており、川西高原・洱海系青銅器の銅柄と新たに開発された鉄劍が合体した様相を呈している。銅柄鉄劍という新たな技術は、中原と北方青銅器文化帯である中国西北部との接触地帯にまず出現している。鍛造鉄器の技術が新疆などの西北部を介して中原に伝播したと同時に、こうした技術が中国西北部から川西高原へもたらされたことを示す重要な事実であると考えられる。

また、四川省炉霍県で採集された帯鉤が注目される(故宮博物院・四川省文物考古研究院2005)。図8に示したように、この帯鉤は虎が鹿を足で押さえつけた意匠であり、オルドス青銅器文化にみられる帯鉤の意匠と極めて類似しており、その他の形態も同一なものである。これはオルドス青銅器文化の帯鉤が

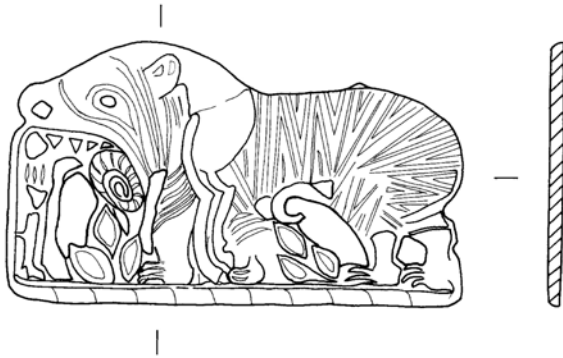


図8 四川省炉霍出土帶鉤（縮尺2／3）

川西高原に搬入したものと考えらるべきであり、直接の物質文化の伝播と見なされるものである。その直接的な流入地は寧夏固原や甘肅慶陽地区などの隴西地区であろう。このような意匠の帶鉤は、甘肅省鎮原県呉家溝口、寧夏固原楊郎第1地点7号墓・楊郎第3地点7号墓に認められる(宮本2002)。さて、呉家溝口の帶鉤はオルドス青銅器文化第3期のものであり、楊郎第1地点7号墓は第4期、楊郎第3地点7号墓は第5期に相当する(宮本2002)。すなわち長城地帯青銅器文化第5期・初期鉄器時代に相当し、前5世紀～前3世紀に属する(宮本2008)。同じ時期には前5世紀の寧夏中衛県狼窩子坑3号墓で川西高原青銅器文化の特徴を持つ山字形格鉄劍3a式が、前4世紀の寧夏固原楊郎第1地点12号墓やその他の地点において、山字形格鉄劍4b式が出土している。すなわち川西高原青銅器5段階あるいは4段階にも、川西高原の石棺墓文化と長城地帯青銅器文化との波動的な相互の交流が示されることとなった。そして、こうした接触を介して、このようなオルドス青銅器文化の動物闘争文が雲南石寨山青銅器文化の動物闘争文の祖形的な意匠となった可能性を考えることにより、従来問題視されていた石寨山青銅器の動物闘争文の成立が理解できるに至るといえるであろう。例えば、このような動物闘争文が長城地帯と雲南地域の間地域に存在しないことを以て慎重な立場を取っていた今村啓爾(1985)も、

炉霍出土帯鉤の存在から、より踏み込んで石寨山文化の動物闘争文の系譜が北方青銅器文化との接触にあることが理解されたのである。さらに双円柄銅劍の出現も、このような関係性の中に生まれたものであると解釈される。

一方で、川西高原青銅器文化第4段階からは、茂県牟托1号墓には中原系の青銅彝器が認められるとともに、巴蜀式銅劍が川西石棺墓に共伴する事例が認められる。すなわち蜀との接触が認められるのである。さらに石棺墓文化第6期には、前漢との接触が認められるとともに、その接触地帯には前漢の郡治が作られるに至っていく（宮本2009）。そしてその段階は青銅器から大きく鉄器へと移行していく段階であり、青銅器文化の終焉段階でもあった。

7 まとめ

成都盆地と地形や植生を含めた生態環境を大きく異にする川西高原から洱海地域は、先秦時代において、文献にも記載されているように小規模な農耕と牧畜を主たる営みとする牧畜型農耕社会の人々が住んでいた（宮本2009）。その人々は、石棺墓という地域的特性を持った墓制を営む人々でもあった。こうした人々が生み出す青銅器やそれを含めた青銅器文化は、雲南の石寨山文化を含め、古くから北方青銅器文化との関連性が求められてきた。しかし、その確実な系譜関係や影響関係、あるいはその相対的位置づけに関しては、これまで実証的な議論が為されてこなかったと言えよう。本稿では、川西高原地域や洱海地域という辺疆地域の青銅器文化の始まりから終わりまでを検討し、さらにその変遷過程を明らかにしてきた。とともに、実年代をこれまでの中原系文物との関係から推定する見方を改め、北方青銅器文化の変遷の中に位置づけることにより、その実年代の遡及を試みた。さらに、これまで中原を核とした農耕社会を中心とする偏重した見方を改め、独立した二つの大きな文化系統、すなわち農耕社会と牧畜型農耕社会という異なる文化系統において、後者の中に本地域を位置づけることにより、本地域の青銅器文化を正当に位置づけできたものと思われる。特にその実年代に関して、本地域の青銅器文化をその始まりからその終焉において妥当な年代を割り出したものと思える。青銅器から鉄器への

移行も、銅柄鉄剣という形で比較的早い段階に成立していたことを論証したつもりである。この点も、本地域が北方青銅器文化の系統の中で位置づけできて始めて解釈が可能なものである。これに対しては、今後様々な議論や反論が予想される。その技術的な系譜関係や具体的な鉄生産のあり方など、探求すべき問題は沢山あるが、爾後の課題として残しておきたい。

(2009年9月、四川省炉霍にて攔筆。)

【注】

- (1) 町田章は、洱海系銅剣と呼称して、川西地方（四川省西部）と滇西地方（雲南省）の両地域の銅剣を示している（町田2006）。しかし、本稿では、狭義の洱海地域（雲南省西部）の青銅器として洱海系青銅器を示すものであり、川西高原青銅器と地域的に区別したい。

【参考文献】

- 今村啓爾1985「滇西の剣」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第3号
雲南省博物館1959『雲南晋寧石寨山古墓群発掘報告』
雲南省博物館1995「雲南劍川海門口青銅時代早期遺址」『考古』1995年第9期
雲南省博物館文物工作隊1975「雲南德欽永芝発現的古墓葬」『考古』1975年第4期
雲南省博物館文物工作隊1983「雲南德欽県納古石棺墓」『考古』1983年第3期
雲南省文物考古研究所2005「雲南中甸県石棺墓」『考古』2005年第4期
雲南省文物考古研究所・大理州文物管理所・劍川県文物管理所2009「雲南劍川県海門口遺址」『考古』2009年第7期
小澤正人2007「戦国時代から秦漢時代にかけての四川盆地と川西高原の文化変遷」『中国考古学』第7号
河南省文物考古研究所・三門峽市博物館工作隊1999『三門峽虢国墓』文物出版社
韓建業2007『新疆の青銅時代和早期鉄器時代文化』文物出版社
故宮博物院・四川省文物考古研究院2005「2005年度康巴地区聯合考古調查簡報」『四川文物』2005年第6期
四川省文管会・茂汶県文化館1983「四川茂汶羌族自治州石棺葬発掘報告」『文物資料叢刊』第7輯
四川省文物考古研究所・甘孜藏族自治州文化局1991「四川炉霍卡莎湖石棺墓」『考古学報』1991年第2期

- 謝輝・江章華2002「岷江上游的石棺墓」『四川文物』2002年第1期
- 徐学書1999「關於滇文化和滇西青銅文化年代的再探討」『考古』1999年第5期
- 白鳥芳郎1977「石寨山文化に見られるスキタイ系文化の形態」『江上波夫教授古稀記念論集（民族・文化篇）』山川出版社
- 早期秦文化聯合考古隊2008「2006年甘肅禮県大堡子山東周墓葬發掘簡報」『文物』2008年第11期
- 高浜秀1977「四川、雲南の劍をめぐって」『MUSEUM』1977年3月号
- 張增祺1983「略論滇西地区的青銅劍」『考古』1983年第7期
- 童恩正1977「我国西南地区青銅劍的研究」『考古學報』1977年第2期
- 童恩正1987「試論我国從東北至西南的辺地半月形文化伝播帯」『文物与考古論集』文物出版社
- 唐飛・金国林2009「四川炉霍晏爾龍石棺葬墓地發掘」『2008中国重要考古發現』文物出版社
- 寧夏文物考古研究所・寧夏固原博物館1993「寧夏固原楊郎青銅器墓地」『考古學報』1993年第1期
- 白雲翔2005『先秦兩漢鉄器的考古学研究』科学出版社
- 宝鷄市考古工作隊1993「宝鷄市益門村二号春秋墓發掘簡報」『文物』1993年第10期
- 宝鷄市博物館1988『宝鷄強国墓地』文物出版社
- 宝興県文化館1982「四川宝興県漢代石棺墓」『考古』1982年第4期
- 町田章2006『中国古代の銅劍』（奈良文化財研究所學報第75冊）
- 宮本一夫2000『中国古代北疆史の考古学的研究』中国書店
- 宮本一夫2002「隴西地域青銅器文化の変遷とその特徴」『史淵』第139輯
- 宮本一夫2007「エルミタージュ美術館所蔵ミヌシンスク地方の青銅器」『東アジアと日本—交流と変容』第4号（宮本一夫2008「エルミタージュ美術館所蔵のミヌシンスク地方の青銅器」『長城地帯青銅器文化の研究』（シルクロード学研究Vol.29）
- 宮本一夫2008「中国初期青銅器文化における北方青銅器文化」『長城地帯青銅器文化の研究』（シルクロード学研究Vol. 29）
- 宮本一夫2009「川西高原石棺墓の構造と変遷」『中国考古学』第9号
- 宮本一夫・高大倫・唐飛2009「中国四川省晏爾龍石棺墓地の發掘調査」『日本考古学協会第75回総会研究発表要旨』
- 茂県羌族博物館・阿壩藏族羌族自治州文物管理所1994「四川茂県牟托一号石棺墓及陪葬坑清理簡報」『文物』1994年第3期
- 茂汶羌族自治县文化館1981「四川茂汶県營盤山的石棺葬」『考古』1981年第5期
- 茂汶羌族自治县文化館1985「四川茂県別立、勒石村的石棺葬」『文物資料叢刊』第9集
- 山本達郎1974「石寨山文化の一側面」『東南アジア—歴史と文化—』4号
- 羅豊1993「以隴山為中心甘寧地区春秋戦国時期北方青銅文化研究」『内蒙古文物考古』1993

年第 1・2 期

劉得慎・朱建唐1981「甘肅靈台景家莊春秋墓」『考古』1981年第4期

涼山彝族自治州博物館・成都文物考古研究所2009『老龍頭墓地与塩源青銅器』文物出版社

林澧2002「夏代的中國北方系青銅器」『邊疆考古研究』第1輯

Chên Tê-Kun 1946 The Slate Tomb Culture of Li-fan. In *Harvard Journal of Asiatic Studies*, vol. 9-2

Pirazzoli-t'Serstevens, M. 1974 La Civilization du Royaume de Dian à L'Époque Han.
In *Publication de L'École Française d'Extrême-Orient*, vol. 94